

海岸の景観保全：消滅寸前のシロヨモギ

白 崎 仁

最近、植物の絶滅危惧種調査（レッドデータブック：RDB）が話題になることが多く、一般にも種の保全に対する関心が高まっている。私も種の保全調査に協力しようと思うが、そもそも種の保全調査はいったいどんな意味を持つのか、疑問に思うことがある。植物に限らず動物も含めて、あらゆる生物が、単体または単一の群集として生活していることはありえない。普通は、多くの種が複雑に関連しあって生態系を構成していると考えられる。それなのに、種の保全リストにとりあげられているものは種名だけで、その有無や頻度についての調査が目的のように見える。種の保全とは、その種があればよいのではなく、その種の生育する幅広い意味での環境が維持されていて、はじめて保全が達成される。よく言われることだが、消滅する前に移植すればよい、と短絡的に結論される。しかし、本来の目的は、種の保全だけではなく、種の生育環境の保全にあるのでしょ。良い自然環境が維持されている指標として、RDBのリストができあがっているはずだ。

新潟市の西端に生活する私は、急激な環境悪化を目の当たりにして、いったい世の中はどうなっているのかと深く思うことがあったので、シロヨモギを題材にしてその実態を紹介したい。シロヨモギはヨモギの仲間で、草丈は低い、全体に白毛で覆われ、晩夏には美しい大きな花房をつける。シロヨモギは、新潟県では佐渡島に分布せず、柏崎市以北の越後の海岸沿いに限られており、最近ではほとんど生育地が確認できなくなっている（新潟県 1979；石沢 1989、1997）。柏崎市荒浜の東京電力原発敷地内にあったものは、一部移植されて生き残るだけで、もとの生育地は消滅した（柏崎の植物編集委員会 1981）。酒井（1987）によれば、「かつては、北蒲原ではシロヨモギの群生で海岸がまっ白に見え……」と述べられるほど、越後の海岸では重要な景観を構成していたのである。しかし、新潟県のRDB植物候補検討資料（新潟県 1998）では、絶滅危惧Ⅱ類（VU：絶滅の危険が増大している種）と位置づけられている（本誌 1998、23・24号、新潟県レッドデータブックの調査にあたって情報協力をお願い、を参照）。消滅を警告する文献や行政当局による文書があり、「建造物などの人為的な海岸砂丘の破壊をさけるべきである」とはっきりと指摘されているにもかかわらず、なんら特別な保護は加えられていない（新潟県 1983）。私の近所の海岸は、「日本海夕日ライン」と名づけられており、シロヨモギが比較的多く生育していたが、その生育地の真上に道路（国道402号線）が建

設された（写真1）。やがてこの道路は新川を横断するはず



写真1 シロヨモギの生育地上に作られた道路と廃棄物埋立地。廃棄物埋立地を囲む高い壁は景観をさげぎってしまった。

で、4車線拡幅も予定されている。新川より南の海岸にはシロヨモギは見あたらない。この道路に隣接して産業廃棄物の不燃ゴミ埋立地が進行している。今年5月まではこのゴミ埋立地の場所にも多数生育していたが、今は消滅した。その5mほど先にはあとわずかに残るシロヨモギが生育している（写真2）。高い壁にさげぎられて見えないが、ゴミ埋立



写真2 ゴミ埋立地の最前線付近で生育するシロヨモギ（矢印）。

地に隣接して、いったいなにを燃やしているのか、あやしげな煙突が見える（写真3）。とてもダイオキシン対策が施されているようには思えない。煙が強い西風にあおられて

松林にたなびいている。その壁ぎわには、ナスやトマトなどの野菜が栽培されており、ダイオキシンの影響を観察しているように見える。食用なのだろうか。まさか！



写真3 わずかに生き残っているシロヨモギ（矢印）は、埋立地の進行によって消滅の危機にある。

シロヨモギの消滅は人間の生活に無関係だが、砂丘を越えて佐渡島が見えるこの景観は、いったい誰のものか？ 廃棄物処理業者だけの所有物ではないはずだ。県が名づけた「日本海夕日ライン」は、いこいの場所として「砂山」の歌で親しまれた新潟砂丘のすばらしい景観を、みんなで保全する目的ではないか、と私は思っていた。雄大な砂丘に向かってゴミ原を分け入れれば、チガヤの白い綿毛が空にまいあがり、さまざまな海岸植物群落が展開する。背景には佐渡の島影に赤い夕日が沈む。この景観は目に焼きつくようだ。シロヨモギはその景観保全の象徴の一つである。シロヨモギは単体で生育するのではなく。ハマエンドウ、ハマヒルガオ、ハマニガナ、スナビキソウ、ハマボスなど美しい花が咲く、多くの海岸植物と共生している。これらの海岸の景観を踏みにじって、廃車の山が作られ（写真4）、さ



写真4 うず高く積み上げられた廃車の山。これが「日本海夕日ライン」の実態。

らには廃棄物を地下に埋め、それでも足らずに、高々と塀

を建てて視界をさえぎり、新たなゴミ捨て場がさらに作られようとしている（写真5）。その内部には、おぞましいも



写真5 柱を立てて壁を築き、また新たに廃棄物埋立地が増設される。右端（矢印）には焼却用煙突が立つ。

のが積み上げられることになる。もうすぐ、佐渡に沈む夕日は見られなくなる。波打ち際に、うず高くテトラポッドが積み上げられている。真夏の海岸には多くの車が砂丘に侵入して草花を踏み荒らす。7月に入って、道路沿いには、草をはぎ取って広々とした駐車場が作られた。道路の陸側には高さ2メートルほどの砂防堤が建設中である。その上にはクロマツが植えられるのだろう。風で砂が巻き上げられる駐車場と、風と砂を防ぐ砂防堤の建設は明らかに矛盾している。

私は実験的にシロヨモギを庭で栽培してみた。砂嵐、寒風、真夏の乾燥と高温などの厳しい環境に耐えて生育するので、栽培は容易かと思ったが、家陰や庭木の多い場所では強い直射日光があまり当たらず、いくら水やりに気をつけていても数カ月で元気を失って消滅してしまった。シロヨモギにとって松林はもっとも危険な存在に違いない。強風と砂嵐を防ぐためには松林は必要だ。毎年冬季には、道路は移動するおびただしい砂に埋められ、除去作業は雪深い地域の除雪作業に匹敵する、まるで「砂の産出国」だ。おそらく人間の住みやすい環境とシロヨモギの生育条件とは一致しない。しかし、「いこいの場としての海岸の景観」を、「人間」と「シロヨモギを含む多くの海岸植物群」とは共有できるはずではないか。

ゴミ捨て場のそばに「海をきれいに」、「だれかがこまっている」と書かれた看板が立てられている（写真6）。その前を荷台には、山のようにゴミを積み上げたダンプカーが通過する。看板は五十嵐中学校生徒の作品だが、これを立てた子供たちの心は深く傷ついているに違いない。国道沿いには、ある政治家署名の「美しき入日の道」と題する高さ3mもあるりっぱな石碑が立っていたが、私は「道は美しくない」と思う。「砂山」の歌はどこの世界の事か！ もうすぐ、ゴミの山に沈む夕日が「日本海夕日ライン」と呼ば

れるようになる！そんな「日本海ゴミライン」を見るのは耐え難い。



写真6 廃棄物埋立地わきに立てられた五十嵐中学校生徒の看板。子供たちの悲しい叫び声が聞こえてくるようだ。

参考資料

- 石沢 進 (1989). 新潟県植物分布図集 10集 pp. 381 - 382. 植物同好じねんじょ会.
- 石沢 進 (1997). 残しておきたい新潟市小針浜 (海岸) の海浜植物. 植物保護 22: 2-3.
- 柏崎の植物編集委員会 (編) (1981). 柏崎の植物. 256pp. 柏崎市教育委員会.
- 新潟県 (1979). 砂丘植生. 第二回自然環境保全基礎調査-植生調査報告書. pp. 90-91. 環境庁委託調査.
- 新潟県 (1983). 五十嵐のシロヨモギ. 新潟のすぐれた自然植物編-新潟県自然環境保全資料策定調査書. pp. 556-557. 新潟県生活環境部自然保護課.
- 新潟県 (1998). 自然環境保全基礎調査 (種の多様性調査) RDB植物候補検討資料. 新潟県環境保健部環境保全課.
- 酒井 昭治 (1987). 新潟県海辺の植物. 271pp.

1999年(平成11年)11月1日 (月曜日)

新潟日報

日報抄

そもそも日本人は、森と親しむ体験が乏しい民族なのだろうか。山形大名菅教授の北村昌美さんは著書で「ほとんどの日本人は日常生活の中で自然との直接の接触が少ない」と指摘している▼ヨーロッパの人々が森の散歩を楽しむのに対して、日本の場合多くは、遠景として山や森林を眺め、それで満足している。借景である。身近にある里山の荒廃が指摘されてから久しいが、里山の荒廃の要因は森林に愛着や関心が薄いことも影響している

ように思える▼新潟日報窓欄にも「里山は荒れ放題」と心配した投書が掲載されていた。里山はコナラやカシワ、アカマツなどの木々でつくられ、かつて樹木はたぎぎになり、落ち葉はたい肥に使われ、生活と一体の存在だった▼里山が荒れていくのは、ゴルフ場などの開発よりも、手入れされないで放置されていることによる影響が大きい。放置された里山は、やぶになるため風通しは悪く日は届かず、ユリやランなどの花は咲かなくなり、昆虫や小動物も少なくなる。そこは新しい生命の息吹がない「沈黙の

世界」だ▼緑があればいいというものではない。里山や森林は泣いている。秋の七草は、日本人の心の花でもある。里山などの荒廃でキキョウは県内ではほぼ絶えたといわれ、妙高でわずかに見られるだけになった。オミナエシも激減している。二十一世紀は秋の五草、いや三草になってしまいかもしいれない」と警告する学者もいる▼山を守るのは高齢者が多い。その人たちの手に負えなくなっている。手遅れにならないうちに、里山にもっと目を向けて緑と向き合い、緑と対話し守ることが必要だ。